

# 乳幼児の人間関係力に及ぼす保育者の関わりに関する一考察

Dalrymple 規子<sup>1)</sup>

## How does a Nursery School Teacher's Relation Affect The Competency of a Small Child's Relation?

Noriko DALRYMPLE

乳幼児の人間関係力を育てていくのに、保育者の関わりは非常に大きい。N保育所の4歳児公開保育(6月)の分析を始め、そこに至るまでの4月からの保育者の関わり及び子どもの姿を考察した。保育者が、子どもたち一人ひとりの個性を掴みつつ、他者への関心がまだ弱いと理解していたこと、それ故一人ひとりを大切にしつつ、機会あるごとに友だちと自然に関われるよう保育を構成してきたこと、そして、友達間のトラブルをどのようにお互いにつながっていけるかを考えるチャンスと捉え、橋渡しとしての役割を積極的に取ってきたことが明確になった。乳幼児の人間関係力を培うために、これらの保育者の能力向上が重要であることが示唆された。

キーワード：幼児と保育者の関わり、理解、考察力、保育の構成、友達間のトラブル

### 1. はじめに

保育の現場において、乳幼児にとって保育者は非常に重要な存在であることは、周知のことである。保育者には、さまざまな役割があるが、子どもの人間関係力を育む視点から見た場合、森下(2007)にあるように、①子どもとの信頼関係を築く(安全基地) ②子ども同士の関係をつなぐ ③自己主張を支える ④自立を支える という役割がある。特に、②の視点に焦点を当てた場合、子どもの育ちの内容に関し、平成29年に告示され、平成30年4月より適用される幼稚園教育要領及び保育所保育指針では、保育の内容の人間関係の項目において、どちらも概ね共通に下記のように書かれている。

#### 人間関係

他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

#### 内容

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (10) 友達とのかかわりを深め、思いやりを持つ。

また、そのために、保育者として留意することについては、次のように記されている。

- (1) 教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながらあきらめずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しを持って自分の力で行うことの充実感を味わうことができよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。

1) 短期大学部幼児教育学科

2017年6月15日にあったK市N保育所における4歳児の公開保育では、子どもたちが生き生きと自分たちを表現しているとともに、その中に、子ども同士の他児との葛藤や共感等の深いかかわりがあった。そして、そこには担任保育者の関わりがあった。ともすると、自由に活動を始めると、他児との関わりがあまりないままで、過ごしてしまうということもある中で、子ども同士のかかわりの多さを感じる公開保育であった。それはなぜであろうか。

筆者は、常々、基本的信頼感や安定した愛着を持たれた後に、大人や子どもとやりとりが多ければ多いほど、子どもたちは人間関係を築いていく力が養われていくと考えている。この、やりとりの機会をどのように整えていくか、ということが非常に大切であるように思われたのが、この公開保育である。

今回、公開保育で行われた保育そのものの分析とともに、そこまでの過程を時間を追ってみたい。

## 2. 方 法

K市N保育所における武藤保育士による4歳児クラス（男児12名女児9名計21名）での2017年6月15日の保育を分析・考察する。その上で、そこに至るまでの、年度当初からの保育者のこころがけや姿勢・子どもたちの活動の様子を、武藤保育士による記録及び武藤保育士へのインタビュー内容から分析する。そして、保育の現場における乳幼児の人間関係力が、保育者のどのようなかかわりや姿勢から培われていくのかを考察する。

## 3. 結果及び考察

### (1) 公開保育当日の姿

4歳児公開保育では、今まで続けている「道路やバスを貼った大きな画面に、自分のイメージしたことを描く活動」を前々日に引き続き、行った。この公開保育に先立ち、武藤保育士が活動設定の理由等を下記のように記述している。

1. 活動名 一緒に遊んで楽しいね
2. 活動のねらい 自分のイメージしたことを表現する中で、友達と一緒に活動する楽しさを感じる

### 3. 活動設定の理由

クラスのほとんどが進級児で、そこに二人の転園児が加わり、4月の生活がスタートした。年中組になったことに喜びを感じて張り切って登園してくる姿が多くみられるが、新しい環境に不安な気持ちもあることを、しっかり受け止めて、必ず登降所時に抱きしめ、スキンシップをはかったり、身の回りの始末を手伝ったりすることで、保育士への信頼感が持てるようにしていった。頑張っている姿を大いに褒め、一人一人の思いに十分寄り添っていくことで「先生！おはよう！」と元気に挨拶をして部屋に入ってくる子が多くなった。

5月に入ると保育所生活も安定し、園内の様々な場所で自分の好きな遊びを見つけて楽しめるようになってきた。また、友達と一緒に遊ぶ事の楽しさを体験できるような集団遊びを楽しむ機会を作り、あそびを積み重ねてきたことで、友達と触れ合って、好きな遊びと一緒に楽しむ姿が見られるようになってきている。しかし、まだまだ友達とは遊びたいが上手く遊べない、自分ではなかなか友達に声をかけられない姿も見られた。

そこで今回は、日頃ブロックで乗り物を作って走らせ1人で楽しんでいる子どもの興味を捉え、道路やバスを貼った大きな画面に、自分のイメージしたことを描く活動を設定することにした。イメージを共有しながら描く中で、お互い描いたり作ったりしたものを見合ったり、イメージしたことを伝え合うなど、一緒に活動することの楽しさが感じられるのではないかと考える。

今後さらに友達への関心を高め、自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け入れたりする等、様々な葛藤を経験しながらつながりを深めて欲しいと願っている。また、保育士や友だちと活動することが“楽しい”“もっとやりたい”と好奇心や自信をもって遊びや活動に取り組めるようになってほしい。

武藤保育士は研究会において、自分の作ったバス（6月6日）を道路に走らせたい、と子どもたちから声があがり、その時に、その道路の周りに、家や草木を作っていこうと、イメージが多く出てきたと述べている。その上、自分たちで「街」と命名して遊んでいたとのことで、武藤保育士は、子どもたちが

イメージを共有し、友達と関わって遊ぶ楽しさを味わっているのではないかと考察している。

そして、当日の姿からは、子どもたちの姿としては、下記のような姿がみられた。

- ・一人ひとりが自分らしくいられる。
- ・先生のことが大好きな子どもたち—先生に見せたくて、認められたくて「先生！先生！」と呼ぶ声がある。
- ・それぞれ好きなところに貼ると、それぞれのイメージがぶつかる—「私もここに貼りたいかった」と友達に言い、ゴタゴタしている姿があちこちにある。
- ・自分の好きなように、街を作りつつ、皆のものを見ている。そして、お互いにこの「街」のことを話している。
- ・「おうちにリンゴの木」「病院」「ホテル」「路面電車」「マンションのおうち」「ホテルが火事」等々、創造してみたり、本人たちの生活が垣間見られるような発言が多くある。
- ・こっちに貼ってみたり、あっちに貼ってみたりと、全身を動かして全身で作品を作っている。
- ・怒って、ぶつかって、泣いてしまうけれど、先生の助けも借りながら、自分なりに修復して立ち直っている。

一方、保育者の姿としては、

- ・一つ一つの子どものからの発言に、丁寧に応答している。
- ・自分が貼りたいかったところに、貼られてしまって訴えてくる子どもに「いい土地は早く売れてしまうね…」等、保育者も子どもたちの世界に溶け込んで、善悪ではない対応をしている。
- ・けんかをしている2人の中に入って、代弁をしてあげながらも、どんな解決法が一番いいのかと真剣に一緒に考えている。

これらの保育者の姿から、平岡は、子どもたちは受け止められたという感覚を体験し、そのことの積み重ねにより、相手の気持ちを察したり、自分で解決したりする力を育くんでいるのではないかと述べている。

また、このB紙9枚分の、大きいけれど制限のあるキャンパスの上で、子どもたちが思い思いに自分

のイメージを繰り広げ、かつ、共通のイメージを持つという体験ができること、同時に制約のある広さゆえに、友達とぶつかる体験とそこで、お互いの思いを聞き、歩み寄り、あるいは、譲っていくという体験を数多くできることは、子どもの人間関係力を育てていく上で、貴重な機会であるとともに、保育者の手腕が問われるときでもあると思われた。

## (2) 4月からの子どもたちの姿と保育者の思い・関わり

この公開保育に至るまでの、子どもたちの様子と、その子どもたちに対する保育者の思いが、日誌及びエピソードの中に綴られている。また、インタビュー内容も取り上げながら、時系列に見ていきたい。

エピソード1 ここに描いてもいい？

(4月27日)

Y君は、仲の良い友達とクラスが離れてしまい、新しい環境になかなか馴染めずにいた。時々母を思い出しては「お家に帰りたい。」「今日は早番がいい。」と泣き出すこともあった。

普段Y君は、ブロックで車を作り走らせて遊んでいる。数名の男の子が思い思いの車を作って遊ぶが、かわりは、ほとんど見られなかった。

そこで、保育士がB紙1枚分の大きさの紙と、ねずみ色の短冊を出すと、ブロック遊びの男児を含め、近くで遊んでいた女兒が集まってきた。「何作るの?」と興味津々。「道路を作って遊ぼうか!」と誘った。「やりたい!」と大喜びで参加する子どもたちの様子をY男も立って見ていた。「Yくんもやる?」と誘うと、Y男も笑顔でうなずいた。まずは道路を糊で思い思いに貼り付けた。Y男は、糊を持ってきているが遊びに参加できないでいた。他の子が、あつという間に道路を完成させた。道路を貼りながら「ここに私の家がほしいな〜。」「じゃあさあ、信号もいる。」など、イメージを膨らませ、会話をする子どもたちに「クレパスで描いてもいいよ。」と保育士が声を掛けると、Y男もクレパスを持ってきた。あちこちに子どもたちのイメージするものが描かれていく中、黙って見ていたY男が「ここに描いてもいい?」と道路で囲まれた隙間を指さした。一緒に遊んでいた子の一人が「いいよ〜。」と返事を

した。すると、水色のクレパスを出し、黙々と塗りだした。「Yくんの池ができてきたね。」と保育士が声を掛けると、「うん。」と言い、嬉しそうな顔で隙間なく塗り続けた。

(保育者の考察)

ブロック遊びは好きだが、あまり楽しそうではない姿がずっと気になっていた。時々、空いた棚の中に入り込み、友達を見つめている姿があった。友達と一緒に遊びたいのではないかと考えた。そこでY男が興味を持っている車で遊べる環境を整えてみた。保育士の誘いに笑顔でうなずき糊を持ってきたY男の姿から、自分もやってみたいという気持ちを感じられた。糊を持ってきたものの結局遊びに入れなかったY男の心の中には、“やりたい気持ち”と“自分から一歩踏み出せない気持ち”があり、心の中で葛藤があったのではないかと考える。しかし、出来上がった道路を見たとき、更にY男の心が大きく動いた瞬間であったのだと思う。「ここに描いていい？」という言葉が聞かれた時、Y男が自分から動き出すまで待つて良かったと心から思った。友達と一緒に遊べる環境・楽しいと思える環境が、遊びへの意欲に繋がりを、生活への意欲にも繋がることを願う。

武藤保育士は、インタビューの中で、4月は自分自身が子どもたちとの信頼関係を築いていくための関わりに焦点を当てたと述べている。出会い当初は、子どもたちを、個々は際立っているが、「私が」「僕が」でお互いに相容れない、絡まるころのない感じと理解している。4月7日には、子どもたちの姿を「全体的にあそびこめない。すぐ飽きてしまう。」と捉えている。4月10日には「いろんなことに興味を持てる子どもたち」と捉える一方、「トラブルの多いクラス」のため、安全にあそべるようにと、その対応に追われている自分があると振り返っている。そのような中で、彼女が心がけたのは、まずは一人ひとりと関わり、その次に、2人でも3人でも気の合う友だちとかかわれるようにということであった。

一人ひとりと丁寧に関わり、信頼関係を築こうとしている姿の一つの例が、この「エピソード1」である。Y男が、今までの生活からの変化についていけなく戸惑い、不安に思っている中で、彼を強制的

にあそびに引っ張ることなく、Y男の好きな遊びに寄り添いつつ、自然に他の子どもたちと共通の空間の中にいられるように、と環境を整えている。一人ひとりが自分の遊びを楽しめるようにということと、一人でも多くの友人と何らかの形で関われるようにという武藤保育士の思いが感じられる。実際に、下記のように保育日誌にはそのことが繰り返して述べられている。

#### 5月第1週

週の反省：1日のみの保育であったが、所庭では、友達と一緒に草花で遊んだり、虫探しをしよう！と声をかけ合う姿が見られた。あいにくの雨ですぐに室内へ入ったが、気の合う友達ができてきた子が増えたので、一緒に遊ぶたのしさを味わえるよう援助していきたい。

#### 5月2週

9日(火)：室内遊び・広告遊び(剣、ほうき、カバン、リボン)

保育士やクラスの友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるよう、フープ島の集団遊びをした。声をあげて喜んだり、仲間を呼んでフープ島に逃げこむなど、みんなで楽しい時間を共有することができた。“友だちと一緒に遊ぶ事の楽しさ”を感じられる体験を多くもっていきたい。

10日(水)：昨日のあそびにアレンジを加え、再び遊んだ。今日はクラスの友達とより心をつにして支え合えるよう、担任がサメになって遊びを盛りあげた。少ない島により多くの友達が入れるよう「立った方が良い」という声があがり、子どもたちからの提案を取り入れ更に遊びが盛り上がった。

週の反省：家庭の日については昨年度のことを覚えている子もおり、友達同士で伝え合う姿も見られた。全体的に思ったことを言葉で伝えることができる子が多いクラスなので、そういった友達の発信した情報は、口数の少ない子に大きな刺激を与えていると感じる。子どもたちからの「声」を大切に、友達と一緒に遊ぶ、活動することが楽しいと思えるような環境を作っていきたい。

(以上、下線筆者)

武藤保育士は、4月当初から、一人ひとりが自分らしく遊べるとともに、友だちと楽しい時間を過ごせるようにと遊びに工夫を凝らしたりしていた。例えば、新聞紙を使って傘を作り、雨が降ってるから傘をさそうという遊びも、まずは一人ひとりが自分の傘を持って遊ぶが、次には、2人に一つの傘という遊びへと変化をつけ、誰かと関わるといった機会を作ることをしている。

そして5月に入って、少しずつ「保育者との信頼関係づくり」から「友達同士の関係づくり」に重点をうつしてきているのが、この日誌の記録からわかる。9日に行われた「フープ島の集団遊び」は、フープを島に見立てて、保育士がサメになる。そのフープの島に、サメに食べられないように子どもたちが逃げるといった遊びだが、10日には、フープの数を減らした。これは前日より、子どもたちが皆考えあい、お互いに助け合うことが必要になる活動で、実際に、子どもたちの工夫がみられる事例である。

ここで一つ大切なのは、インタビューからわかったことであるが、武藤保育士は「やりたくなかったら見ててもいいよ」と、無理強いはしていないということである。子どもたちが、自分からやるかやらないかを決定できるという自己決定の力を尊重することは、自信（自己信頼感）も育み、自分でいていいんだという自己肯定感を培うこととなる。“自分”が強くなることで、他者—友達—への興味や好奇心も強くなる（田口、2000）。

武藤保育士は、その後も、一人ひとりの活動を生かしながら、それを集団の活動につなげていけるようにと保育を工夫していく。2人でも3人でも気の合う友達から、より広い関係を作れるように…という視点にシフトしていつている。（以下、下線筆者）

#### 5月4週

23日火曜日：全体に向けて指導した。4～5人ほど、個別に援助したが、ほとんどの子が理解し、一人で作り上げることができた。中にはカエルの顔の所にリボンやハートをクレパスで描いてアレンジする子もおり、カエル作りを楽しんでいた。作りながら「このカエルさんたち、どこにいたらうれしいやろ～？」と投げかけると、「池があるといい！」「オタマジャクシと一緒にだと喜ぶよ。」

との声が聞かれたので、次はみんなでカエルの池を作る活動につなげていきたい。

週の評価反省：友だちと一緒に遊ぶ時間を意図的に作るようにしていった。一人ひとりの活動を大切にしながら、作った物を見せ合ったり、それを使って次は何をしよう？と投げかけることで、集団ゲーム以外の楽しい活動にも期待がもて、又、友達を意識できるような活動につなげていきたい。

課題：集団で行う活動を継続し、みんなで遊ぶ楽しさが感じられるようにする。

個々の制作活動であるカエル作りから、子どもたちが「池があるといい」と言ったのに応えようと武藤保育士がした中で、彼女は一人ひとりに画用紙を渡して、それぞれの作品を作るという形でなく、大きな池を作る形に持っていった。そのエピソードが次のものである。

#### エピソード2 2つの池

(5月30日)

カエルの制作をした後、「池がいる。」と子ども達が言った。そこで、二枚のB紙にみんなで池の色を塗り、カエルを泳がせる日を迎えた。池を見ると、「カエルの葉っぱがいる。」「オタマジャクシ描きたい。」「石も描く。」「魚も描く。」「お花描きたいな。」と、次々に描きたいものをイメージして、声が上がった。

部屋の真ん中にあるシートの上でのりづけをしてから、東西にあるB紙にカエルを貼った。どちらのB紙に貼るか子どもたちに任せた。気の合う友達がいる方に貼ったり、友達同士呼び合った同じ紙に貼ったりした。最初はイメージしたことをそれぞれが描いていたが、池が二つあることで、お互いの池の様子が気になってきた。特に西チームは何度も東チームの池を見に行った。すると、東チームのSちゃんが「ちょっと！来んといてよ！」Aちゃんが「見ていかん。」そしてまた、Sちゃんが「そっちも池あるやろ！」と言いだした。西チームのH君が「いいやん、ちょっと見せてよ。」と言うが、東チームの男の子も加わり、「だめー！自分のトコ行って〜。」と言いだした。次第に言い合う声が大きくなってきたので、保育士が「気になるねえ。どんなの描いたの？」とそれ

その池を見て回り、「葉っぱを細かく切ったんだね。よく頑張ったね。」「オタマジャクシ、たくさん描けたね。」等、お互いが表現している事を言葉にしていくと、少しずつ言い合いが収まり、お互いの池の様子を見合う姿に変わっていった。

(保育者の考察)

作ったカエルを貼りやすいよう、池を二つにしたが、言い合いを始めたのは予想外であった。偶然集まった子ども同士、仲間意識が生まれた事に、驚きと、面白さがあった。「ちょっと来んといて。」「見ていかん。」という言葉から、自分たちの池を大切に思う気持ちと真似をされたくないという思いが伝わってきた。同じ紙にイメージを共有して描くことから楽しい気持ちも共有でき、自分達の池を大切に思う気持ちになったと考える。東チームは、友達の描いたものに共感したり、同じものを描いたりして、一体感が生まれていた。西チームは、東チームの楽しそうな雰囲気気になって見に行ったのではないかと思う。特にH男は、「あっちにメッチャ上手な魚が描いてあったよ。こっちも描こう！」と友達に呼びかける姿があった。友達との遊びを楽しめるように、一人一人の思いを出し合って遊んでいる姿を見守りながら、保育士が遊びに入って気持ちの橋渡しをし、遊びを広げて楽しめるようにしていきたい。

(以上、下線筆者)

言い合いを始めた子どもたちの姿を「予想外」と新鮮に驚くとともに、「面白さ」と捉えた武藤保育士は、「気になるねえ。どんなの描いたの?」と言う声掛けをすることになる。それは、子どもたちの言い合う行為を「自分たちの池を大切に思う気持ちと真似をされたくないという思い」と理解したからこその、声掛けである。1つの池でなく、2つの池だったからこそ、子どもたちは相手の池に（見知らぬ）他者を感じ、自分の池の方を見ようとする人を侵入者と感じる。けれど、この保育士の声掛けとその後の行動から、相手は分かち合いが可能な仲間になっていったのである。

このような、個々の活動を大切にしながら集団の活動を楽しむと同時に、他者とつながる時の不安や葛藤を保育士の助け（本人曰く、橋渡し）を借りな

がら、どのように乗り越えていくかを体験することで、友だちとより繋がりたい・関わりたいという思いが強くなっていく。そして、それが公開保育への活動へとつながっていく。

6月1週

6日(火)：バス作りに興味を示さなかった子ども周りで楽しむ友達の姿を見ることで、「やってみよう。」と言う気持ちになり、やり始める子どももおり、友達の姿の影響力の大きさを改めて感じた。また、やり方が分からなかったり、一人で作ることの不安から作り出せない子どもいたが、個別に関わることで、一人でどんどん作っていくくらい夢中になっていた。

7日(水)：室内遊びをした。友達との関わりが多く見られるようになった分、トラブルも多くなってきている。解決策と一緒に考えたり、自分で伝えられるように言葉を教えたりして援助していった。その際は十分に一人一人の思いを聞くことを心がけた。友達のことが気になる分、トラブルもあるが、一緒に遊ぶ楽しさが味わえるよう、集団遊びなど皆で遊ぶ体験を作っていきたい。

8日(木)：作ったバスを走らせたいという声があがったので、昨日作った道路にバスを走らせた。作ったトンネルに足を引っかけて破ったり、道路の上を思い切り走って友達とぶつかったり…。トラブルも多かったが、どうしたら良かったのか、どうしたらみんなで楽しく遊べるかをみんなで考えられる大切なチャンスととらえ対応していった。

9日(金)：バスを走らせて遊ぶ

週の評価反省：道路作りでは、最初に用意したB紙6枚分の大きさでは足りず、紙をはみ出して道路をつなげる姿があったので、台紙をさらに広げ、B紙9枚分の大きさにした。道路にバスを走らせていると「ここに家を建てたい」「ここに病院があるといいな」など、イメージを膨らませて楽しむ姿が多く見られたので、その子どもたちの思いを受けとめ、より遊びが広がるようにしていきたい。

課題：子どもの姿を受けとめ、どんな環境にしたらより夢中になって遊べるかを考え、環境を整えていく。

ここでの武藤保育士は、トラブルが増えたことは、友達との関わりが増えたこと、友達が気になる存在であること、そしてどうしたら楽しく遊べるようになるかを“考える”いいチャンスだと捉えている。トラブルは、ある種「危機」である。他者がお互いを出し合うということは、“一緒”を感じる時もあるれば、“違う”を感じる時もある。トラブルは、この“違う”ことが受け入れられない時、自分の領域に他者が侵入してきたと感じられた時等に起こる。そして、決裂してしまうと、人と繋がることに対して困難さや嫌悪感を感じる事となる。しかし、相手を聞くスペースがお互いにあったり、その両者の間に考えるスペースがあると、トラブルを乗り越えて、人と繋がることができ、人を知ることの楽しさや、人間関係を築いていく面白さに気付いていくことができる。そのため、このトラブルを善悪を決める機会ではなく、お互いを知り、どうするかを“考える”機会にすることが非常に大切になる。

武藤保育士がトラブルを友だちとより関わられるように考えるいいチャンスと捉え、常にその考えの下、子どもたちに関わっていることが、下記のような子どもたちの姿につながっていている。これは、急にできるようになるものではない。また技術的なことでできるものではない。日常的に続ける必要がある姿勢であり、そのためにも、普段からの子どもたちに対する理解の仕方が非常に重要になる。

#### 6月2週

13日(火)：3回目のバス遊び。通りたい道に誰かが来ると脇の道にそれる子がいたり、道路のめくれを気にしてのり付けする子、また、「ここに家建てたいなー。」「じゃあ、私の家、隣に建てていい？」など今までにない姿が多く見られた。何回か遊んだからこそ、子どもたちの姿に変化が見られたのだと思う。そういった子どもたちの声や姿を受けとめ、よりこの遊びに愛着がもてるよう盛り上げていきたい。

14日(水)：ぞう組と「もうじゅう狩り」の集団遊びと、しっぽ取りをした。2回目ということもあり、ルールを覚え、楽しめる子が多かった。人数集めのゲームでは、「あと1人～、誰か来て～。」とまわりに呼びかける子もおり、友達に積極的に関わる姿も見られた。泥んこ遊びでは、一人での遊びを楽しむ中で、周りにいる友達との関わりが見られ、一緒に楽しさを共有して遊ぶ子が増えてきた。

#### 15日(木)：(公開保育当日)

バスを3回走らせて遊んだことで、本時の活動までに「町」についてのイメージが一人一人できていたからこそ、すぐに活動に取り組む姿につながったと感じる。自分のできるようになったことが楽しい年齢なので、どんな姿でも、「先生！！」と、喜びや驚きを伝える姿に一人ひとり丁寧に対応していくことを心がけた。

16日(金)：室内遊びを充実させていたので、今日の外遊びは大喜びであった。友達との関わりを大切にしたい遊びを意図的にしてきたからか、外に出ると、気の合う友達と遊ぶ子が多く、遊ぶ姿に変化が見られたことが嬉しかった。様々なことに自ら関わりながらも、友達がいるともっと楽しいと思える子が増えている。

週の評価反省：バス作りから始まった今回の活動は、子どもたちの意欲的な姿や「こうしたい！！」という次へつながる声を大切にすることで、クラスみんなで楽しめるものとなったのが良かった。ぶつかり合いも多い集団での取り組みだが、そういった経験も大切に、友達や保育士に支えられて折れた気持ちを修復していきながら、強い心と前向きに活動できる心を持つ子に育てていきたいと思う。

(以上、下線筆者)

トラブルに対して、保育士が仲介に入り、一緒に考えてくれて、最終的には何らかの形に落ち着く体験を多くしてきた子どもたちだからこそ、「ぶつかる」を「つながる」関係づくりに変化させて行けるようになってきている姿がある。だからこそ、皆で

